

石山寺蔵、スペンサー・コレクション蔵、 パーク財団蔵「源氏物語絵巻」断簡をめぐって

—幻の「源氏物語絵巻」、成立背景とそのゆくえ—

青木 慎一

十七世紀の中盤に企画制作された、幻の「源氏物語絵巻」の存在が、このところ注目を集めております。幻の「源氏物語絵巻」とはどういった絵巻なのか、そしてこの絵巻にたいしてどのような研究が進められているのか。まずはじめに、本絵巻の概略についてお話ししたいと思います。幻の「源氏物語絵巻」の一部については、石山寺所蔵の「源氏物語絵巻」「末摘花 上巻」、スペンサー・コレクション蔵「末摘花中巻・下巻」および「帚木」が、辻英子氏の『日本絵巻物抄』の影印版にて^①、同じく辻氏の『在外日本絵巻の研究と資料』にて翻刻が出され、^② その存在は公に知られていました。それに加えて、『源氏物語と江戸文化』において、ニューヨークのパーク財団蔵の「賢木」断簡二葉と、その連れの個人（ベルギー）蔵二葉があらたに詳しく紹介されました^③。発表者はパーク本の調査メンバーであり、主として本絵巻の本文について研究を進めています^④。本年（2008年）8月には小嶋菜温子氏を代表とするニューヨークでの科研調査に同行を許され、調査を行ってきました。この成果も踏まえて、本発表では石山寺蔵およびスペンサー・コレクション蔵の「源氏物語絵巻」の本文を考えます。

『源氏物語と江戸文化』が公刊された2008年には、京都国立博物館に個人寄託されている「葵」六巻、徳川美術館に個人寄託されている「桐壺」三巻もあいついで展示されることになりました。特に徳川美術館で展示された「桐壺」三巻はその所在とともに初公開され、強い関心が寄せられています。さらに、

この年にはルネ・シフェール氏の仏訳とともに、本絵巻を含む12世紀～17世紀までの源氏絵が収録された、豪華本『Le Dit du Genji』も刊行され、^⑤話題となりました。また、本年7月に立教大学で開催された国際シンポジウムの際には、エステル・レジエリ＝ボエール氏によって、新たに「賢木」巻断簡一葉がパリの個人のもとに所蔵されていることが明らかにされました。

こうして原資料の紹介や発見とともに、幻の「源氏物語絵巻」をめぐる研究は近年進展を見せています。『源氏物語と江戸文化』が現存遺品から全体を復元したところでは、すくなくとも全体で四十巻を越す大規模な制作であった可能性があると考えられます。^⑥また、現存遺品で13巻を数えることから、全巻揃いで制作された場合、200巻にも及ぶとする意見もあります。^⑦そのような大規模な絵巻制作の背景として、後水尾院とその周辺の九条家を中心とする公家衆と、京狩野の関係も指摘されます。^⑧

本絵巻の成立をめぐることは、スペンサー・コレクション蔵「源氏物語絵巻」に、詞書を矢野俊長、絵を狩野季通とした万治三年銘の添書があるとした、反町カタログの記載が参考にされてきました。^⑨しかし、小嶋氏による8月の調査において、反町カタログにある「添え書き」は確認できず、かわりに「箱書き」が確認されました。「箱書き」の記載と「添え書き」とは一致しない年記であったそうです。このことは10月末刊行予定の季刊*iichiko*で小嶋氏が書かれていますが、本発表にあたり、先行して口頭報告してよいとの許可を得られたため、本発表でご報告させていただきました。^⑩

さて、本発表の趣旨である絵巻本文の問題に入りたいと思います。本発表であつかうのは、スペンサー・コレクション蔵「源氏物語絵巻」の帚木と石山寺蔵「源氏物語絵巻」末摘花上です。当該場面は、光源氏が方違えのため、紀伊守邸を訪れ、来合わせていた空蟬を発見し、契りを結ぶ場面です。当該場面には4図の絵が配されます。続いて、石山寺蔵「源氏物語絵巻」末摘花上は、夕顔や空蟬のことを忘れられない源氏が、故常陸宮の姫君（末摘花）の噂を聞いて、早速手引きをせまり、思いをつのらせてゆくところを記します。末摘花上では

計6図の場面が絵画化されます。これら本絵巻の絵の様式や解釈などについては、美術史や文学の立場からさまざま論じられるところではありますが、時間の都合上割愛させていただきます。¹¹

一方、本絵巻の本文については、辻英子氏が『在外絵巻の研究と資料』スペンサー・コレクション蔵『源氏物語絵巻』の解説で、「詞書については、「日本古典文学全集」本に大方は一致するが、異なる表現もみられる。」と指摘し¹²、同じく辻氏の『日本絵巻物抄』の解説では、「詞書は青表紙本の肖柏本・三条西家本系統の本文を書写している」とされます¹³。また、田口榮一氏も、「若干の誤写が認められるものの三条西家の証本系統を書写して」いるとします¹⁴。ただし、本絵巻の本文系統についての詳細な異同は、管見のところ世に出ておりません。『源氏物語』の本文異同については、『源氏物語大成』により諸本のおおよその異同が一覧できるようになって以降も、『源氏物語別本集成』や『河内本源氏物語校異集成』が公刊され、青表紙本以外でも詳細な本文異同が把握できるようになりました¹⁵。近年は、『源氏物語別本集成続』が刊行中であり、『源氏物語大成』に未収録であった諸本の本文が多数確認できるようになっています¹⁶。こうした本文研究の進展を受けて、発表者は石山寺蔵「源氏物語絵巻」末摘花上について、本文系統の再確認を行いました。今回の発表ではその成果も踏まえつつ、新たにスペンサー・コレクション蔵の「源氏物語絵巻」帚木の本文系統を再検討します。石山寺蔵本とスペンサー本の本文を比較することで、両者の共通性や差異を明らかにし、その結果から本絵巻の成立背景にすこしでもせまっていければと考えます。

それでは、スペンサー・コレクション蔵「源氏物語絵巻」帚木の本文確認に移りたいと思います。なお、本発表では、本文系統の確認を主としているため、各異同での意味の差異には、時間の制約上ふれることができないことをはじめにお断りさせていただきます。帚木の異同をご覧いただくと分かるのが、肖柏本の本文系統と近いものであることです。「はつかしけにのみ」や「人のとも」などは肖柏本以外に該当するものがなく、「ひましなれば」・「侍らぬ

中にも」・「ねたく心とゝめて」の異同も肖柏本以外の諸本ではめずらしいものです。また、「物いひえ」に着目すれば、池田本系統の本文とのつながりもうかがえます。ただし、「れいも」・「あけたりければ」・「けとをかりける」など、多数の一致を見せる肖柏本や池田本の系統とは異なる本文もあり、独自異文も存在するため、本文系統の特定には慎重を要するでしょう。

石山寺蔵「源氏物語絵巻」末摘花上の本文確認に移ります。ここでも「御みゝとめ給はぬ」や「まかて給けるを」をはじめとして、肖柏本の本文系統に近似していることが分かります。ただし、末摘花上の本文においては三条西家本や横山本、池田本の本文系統とも重なる部分が多い上、青表紙本系統には属さない本文も見られ、帚木同様に本文系統の特定には至りません。今回検討した帚木と末摘花上の本文確認を通して言うならば、帚木の異同には含まれない横山本はさておき、三条西家本は帚木での異同を見る限り、絵巻本文と一致するところがやや少なく、肖柏本、または池田本の系統と近いと捉えていいのかもしれない。この問題については、未検討のスペンサー・コレクション蔵「源氏物語絵巻」末摘花中・下を扱うなかで、改めて考えていきたいと思います。

続いて、「源氏物語絵巻」帚木と承応版本の本文を比較してみます¹⁷⁾。この比較からは、基本的に青表紙本系統の本文に属する部分が多いものの、「あけたりければ」(帚木)・「さうしのもとに」(帚木)・「こひしくおほえたまふ」(末摘花)・「思ひつゝけて」(末摘花)など、青表紙本系統以外の本文の異同が混在している点に着目されます。承応版本の本文については、清水婦久子氏に詳細な研究があります¹⁸⁾。清水氏は、「三条西家系統に属していることは確かであるが、河内本系統の本文やそのいずれにも属さないものを含んでいることが分かる」と指摘し、版本の本文が古来の伝本を書写しただけではない解釈本文であることが原因だとされます。本絵巻の本文と、解釈本文である版本本文とで複数一致が見られる点は、極めて興味深い結果です。今回資料に挙げたものはあくまで本絵巻の本文と合致する異同であり、絵巻本文との比較作業にお

いては、相当数の差異も確認しています。したがって、承応版本の本文がすなわち絵巻本文の参照テキストであると言うことはできませんが、何かの解釈本文をもとにした可能性や複数の本文を校訂した解釈本文である可能性がうかがえる点で注目したいと考えます。

本絵巻の本文の本文確認および版本本文との比較検討の結果をまとめます。今回の帚木・末摘花上の範囲においては、本文系統を特定できるまでには至りませんでした。しかし、肖柏本や池田本に近しいものの、他系統の本文も含まれることから、現存していない本文があった可能性や、複数の本文を参照し、解釈本文を作った可能性も見えてきます。

本絵巻の成立背景を視野に入れるならば、帚木と末摘花上の本文の傾向は共通する部分が多く、一連の絵巻制作には同種の本文が用いられたと考えられるのではないのでしょうか。これは絵巻制作が、ある一つの集団によるもので、『源氏物語』全巻の制作を企図していたと仮定すれば、絵とともにそれに対応するだけの本文を準備していたとの想定が生じてきましよう。また、絵巻が巻ごとに別々のグループによって作られた、いわゆる分担制作のかたちであっても、元となる本文を提供した中心的グループのもと、ある程度統一された意図によって本絵巻が制作されたと言える可能性も出てくるかもしれません。

本発表で見てきた本文の問題からは、後水尾院やその周辺の九条家の関与をはじめとして、絵巻の制作事情につながりうる手がかりは見つけられませんでした。しかし、肖柏本や池田本、または今回確認した本文異同に類似した本文系統をもつ諸本の来歴の問題、今回の発表ではふれることのできなかつた、異同によって生じる解釈の差異と古典学の問題など、本文の検討を通じて、本絵巻の制作背景に近づいていけたらと考えます。また、承応版本以外の整版本や古活字版など、未検討の本文との比較から、近世初期の本文流通の問題も考えていかなければならないテーマかと思います。

本絵巻の問題は本文のみならず、『源氏物語』の絵画化や古典学の問題、制作時期にまつわる日本史学の問題等々さまざまな専門領域と関わってまいりま

す。専門諸氏による問題の解明を通じてこれまで見えていなかった日本文化史の新たな一面、そして物語、物語学の未来に期待を寄せつつ、発表を終わらせていただきたいと思います。

〈幻の「源氏物語絵巻」本文検討資料〉^⑨

● スペンサー・コレクション蔵「源氏物語絵巻」帚木の本文異同

- はつかしけにのみ (215・上段・8) 一肖
- れいも (215・下段・2) 一河・別
- うけ給なからしそきて (216・上段・14) 一三・肖・河・御・国
- 守にはかにと (216・下段・3) 一池・秀・肖・三・河・別
- 心とゝめて (216・下段・7) 一池・秀・三・肖・河・別
- 物いひえ (216・下段・5) 一池・秀・東・穂
- あけたりければ (217・上段・6) 一陽
- ひましなければ (217・上段・9) 一肖・歴・穂
- かゝり給へれば (217・上段・16) 一松・池・秀・三・肖・河・別
- つき侍りぬへく (217・下段・15) 一松・池・秀・三・肖・別
- 侍と申 (217・下段・19) 一大・岩・別
- いつそやの給はせし (218・上段・22) 一松・池・秀・三・肖・河・別
- 侍らぬ中にも (218・上段・2) 一肖・歴
- 侍など (218・上段・3) 一松・池・秀・三・肖・別
- しょうとこそ思て (218・上段・5) 一池・肖・別
- 侍らすなど (218・上段・7) 一松・三・肖・河・別
- 物かたりし給つゝ (218・上段・22) 一池・肖・穂・歴
- けとをかりけると (218・下段・22) 一阿
- ねたく心とゝめて (218・下段・4) 一肖・御
- こゝにね侍らん (218・下段・5) 一松・池・秀・肖・岩・別
- ひきあげ給へは (219・上段・18) 一国

- 分入給て (219・上段・3) 一池・秀・肖・別
- きぬを、しやるまで (219・上段・6) 一松・池・肖・宮・別
- 人のとも (219・下段・16) 一肖
- さうしのもとに (219・下段・3) 一秀・岩・静・東・伏
- さくりよりたるに (220・上段・5) 一河・天

- 独自異文：「心ちすへき」(216・上段・19)、「さうゝ、しかめれと」(217・上段・14)、「歌すうしかちにも」(217・上段・22)、「えうけ給はす」(217・下段・5)、「まいり侍といふ」(219・上段・14)、「きあひえたる」(219・下段・4)

●石山寺蔵「源氏物語絵巻」末摘花上の本文異同

- なつかしかり (535・上段・5) 一池・肖・三・河・別
- こひしくおほえたまふ (535・上段・6) 一国・穂
- 御み、とめ給はぬ (535・下段・1) 一肖・保
- のこりみ給ひたるを (536・上段・15) 一肖・三・日
- てつかひには (536・下段・25) 一横・肖・三・別
- あらしとおもふとかたらひ給 (536・下段・25) 一池・肖・三・別
- 侍らすやあらむといへは (536・下段・27) 一池・肖・三・別
- あたり (536・下段・4) 一池・肖・日・保・前
- 夜のけはひに (537・上段・15) 一池・肖・三・日・保・穂
- 思ひつ、けて (537・上段・5) 一河・伏・国・穂・天・高
- 御ありさまに (537・下段・9) 一横・肖
- たちいて給 (538・上段・15) 一池・肖・三・河・別
- まかて給けるを (538・上段・21) 一肖・国・保・前
- あゆみのきたまふに (538・下段・6) 一横・肖・三・河・別
- 見たまふに (538・下段・16) 一横・池・肖・三・河・別

- いてきなんと (539・上段・4) 一横・池・肖・三・河・別
- 頭中將は (539・下段・16) 一横・肖・阿
- さて (539・下段・17) 一横
- わかひたり (540・上段・3) 一善
- うれうれは (540・上段・6) 一池²⁰・善・日・穂
- 人の心のとやかなることなくて (540・下段・10) 一穂・前
- わかあやまちに (540・下段・11) 一横・池・前
- さやうにかゝやかしきも (541・上段・14) 一横・池・肖・三・別
- おもふにこそ (541・上段・15) 一池・肖・三・別
- おほつかなう (541・上段・19) 一池・肖・三・河・別
- 御ゆるしなうとも (541・上段・20) 一横・池・三・別
- ひめ君の御ありさまもよつかはしく (541・下段・6) 一池²¹・国・伏・穂
- 見えんなど (541・下段・8) 一横・池・三・別
- あさちわくる人も (541・下段・12) 一横・池・肖・三・別
- なま女はうなとも (541・下段・14) 一保

- 独自異文：「御つゝみ」(541・上段・10)、「おはしたてまつる」(541・下段・10)

●「源氏物語絵巻」帚木と承応版本の本文比較

- うけ給なからしそきて (216・上段・14) 一三・肖・河・御・国
- 守にはかにと (216・下段・3) 一池・秀・肖・三・河・別
- 心とゝめて (216・下段・7) 一池・秀・三・肖・河・別
- あけたりければ (217・上段・6) 一陽
- ひましなければ (217・上段・9) 一肖・歴・穂
- かゝり給へれば (217・上段・16) 一松・池・秀・三・肖・河・別

- つき侍りぬへく (217・下段・15) 一松・池・秀・三・肖・別
- いつそやの給はせし (218・上段・22) 一松・池・秀・三・肖・河・別
- 侍など (218・上段・3) 一松・池・秀・三・肖・別
- 侍らすなど (218・上段・7) 一松・三・肖・河・別
- 物かたりし給つゝ (218・上段・22) 一池・肖・穂・歴
- 分入給て (219・上段・3) 一池・秀・肖・別
- さうしのもとに (219・下段・3) 一秀・岩・静・東・伏

●「源氏物語絵巻」末摘花上と承応版本の本文比較

- なつかしかり (535・上段・5) 一池・肖・三・河・別
- こひしくおほえたまふ (535・上段・6) 一国・穂
- のこりゐ給ひたるを (536・上段・15) 一肖・三・日
- てつかひには (536・下段・25) 一横・肖・三・別
- あらしとおもふとかたらひ給 (536・下段・25) 一池・肖・三・別
- 侍らすやあらむといへは (536・下段・27) 一池・肖・三・別
- 夜のけはひに (537・上段・15) 一池・肖・三・日・保・穂
- 思ひつゝけて (537・上段・5) 一河・伏・国・穂・天・高
- たちいて給 (538・上段・15) 一池・肖・三・河・別
- あゆみのきたまふに (538・下段・6) 一横・肖・三・河・別
- いてきなんと (539・上段・4) 一横・池・肖・三・河・別
- わかあやまちに (540・下段・11) 一横・池・前
- さやうにかゝやかしきも (541・上段・14) 一横・池・肖・三・別
- おもふにこそ (541・上段・15) 一池・肖・三・別
- おほつかなう (541・上段・19) 一池・肖・三・河・別
- あさちわくる人も (541・下段・12) 一横・池・肖・三・別

[注]

- ①辻英子編『日本絵巻物抄』笠間書院、2002
- ②辻英子『在外日本絵巻の研究と資料』笠間書院、1999
- ③小嶋菜温子・小峯和明・渡辺憲司編『源氏物語と江戸文化 可視される雅俗』森話社、2008
- ④青木慎一「幻の「源氏物語絵巻」の本文系統について—石山寺蔵「源氏物語絵巻」末摘花上の本文系統について」『立教大学大学院日本文学論叢』第八号、2008・8
- ⑤エステル・レジェリー＝ボエール監修『Le Dit du Genji』Diane de Selliers、2007
- ⑥稲本万里子「パーク財団蔵「源氏物語絵巻」賢木巻断簡について」『源氏物語と江戸文化』（注3掲書）
- ⑦三田村雅子『源氏物語 天皇になれなかった皇子のものがたり』新潮社、2008
- ⑧同6および小嶋菜温子「幻の「源氏物語絵巻」覚書—室町期・近世初期の「源氏物語」享受史から」『立教大学大学院日本文学論叢』第八号、2008・8
- ⑨反町茂雄編『スペンサーコレクション蔵日本繪入本及繪本目録 増補改訂版』弘文荘、1978
- ⑩小嶋菜温子「幻の「源氏物語絵巻」、宴の光と影—スペンサー本「帯木」・パーク本「賢木」断簡にみる」『季刊iichiko』No.100、2008・10
- ⑪注6・7・8掲書など。
- ⑫同2
- ⑬同1
- ⑭田口榮一「「末摘花」絵巻における物語の絵画化—源氏絵場面選択の意識とその造形化の一考察—」鈴木一雄監修・須田哲夫編『源氏物語の鑑賞と基礎知識No.13 末摘花』至文堂、2000
- ⑮池田亀鑑編『源氏物語大成』巻一、中央公論社、1956
源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』第二巻、おうふう、1989
加藤洋介編『河内本源氏物語校異集成』風間書房、2001
- ⑯源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成続』第二巻、おうふう、2005
- ⑰承応版本の本文については、中村康雄・立川美彦・田中夏陽子監修『源氏物語（絵入）』岩波書店、1999（CD-ROM版）を参照した。
- ⑱清水婦久子『源氏物語版本の研究』和泉書院、2003
- ⑲本文異同を確認するにあたっては、注15・16掲書を参考とした（本稿で用いた略号も、基本的に各書の表記に拠る。なお、紙幅の都合上、河内本・別本系統については、同じ本文を持つ本が多数ある場合、一括して「河」・「別」と記した。）。また、版本本文との比較においては、帯木・末摘花上で検討した異同の中で、絵巻本文と承応版本の本文が一致する箇所のみを掲載した。なお、石山寺本・スペンサー本の影印は『日本絵巻物抄』（注1掲書）を、翻刻は『在外日本絵巻の研究と資料』（注2掲書）を、それぞれ参照した。括弧内に記した頁数および行数は、本絵巻の本文の異同を確かめる便宜上、『在外日本絵巻の研究と資料』（注2掲書）の該当箇所を掲げた。
- ⑳『源氏物語大成』所収の池田本には記載が見られないが、『源氏物語別本集成続』で確認した。
- ㉑『源氏物語大成』および『源氏物語別本集成続』には「補入」とある。

* 討議要旨

武井協三氏より、後水尾の代まで廻り得る可能性について理解を示すと共に、反町目録の万治三年の問題をどう処理するのかという成立年代の同定に関する質問がなされ、発表者は現物を見ていないため、判断を保留した。伊藤鉄也氏からは本文の系統論への疑義が提示された。また、江戸英雄氏か

らは九条家が関わっているということの根拠について質問がなされた。発表者はこれらを今後の課題とするとした。